

鬼師の世界

— 白地：カネコ鬼瓦 —

高 原 隆

『鬼師の世界』は大きく「黒地」と「白地」とに分けられる。事実、三州鬼瓦製造組合と、三州鬼瓦白地製造組合が高浜・碧南地区には存在している。前者が黒地の鬼瓦を製造し、後者は白地の鬼瓦を製造する。基本的には同じ製品なのであるが、黒地と白地は窯に入れて焼成する工程があるかないかの違いが、黒地であるか白地であるかを区別する。黒地といわれる最終製品と白地といわれる最終製品は色でいうと実際の見た目が「黒」と「白」とに分かれる。それゆえに「黒地」と「白地」と一般に言われている。また白地は未完成の状態であり、窯に入れ、焼かれてはじめて完成品となる。しかし、窯を持って焼くまでを行なう鬼板屋と、窯は持たずに粘土から鬼瓦を作り、窯入れの手前までの半製品の状態で出荷する鬼板屋が存在し、この二種類の鬼板屋が相互に協力をしながら鬼瓦は作られていく。フィールドワークを始めた当初は、この違いがはつきりせず、なかなかピンと来なかったこともあり、まず冒頭に二つのタイプの鬼板屋の違いについて説明することにした。

『鬼師の世界』は大半が黒地のグループに所属する鬼板屋の話で占められている。事業の規模、その歴史的な流れからいっても黒地の鬼板屋のほうが白地のグループを一回りもふたまわりも上回っているのは事実である。しかし、萩原製陶所の記述（高原 2007、2008）を始めたあたりから、またもっと厳密に言うと、鬼百系

の梶川務の記述（高原 2003）から、白地についてすでに、ここ、ここで書いてはいる。ただ、今回、カネコ鬼瓦をここに紹介することは、『鬼師の世界』に白地の代表的な鬼板屋を書くことにより、鬼師の世界の地平を拡張することを目指している。『鬼師の世界』を書き始めたころは対象を黒地の鬼板屋にまずは絞る予定でいた。何しろ対象が広大で、絞る必要があると見たからである。ところが調査を進めていくうちに、黒地とも、白地ともいえる鬼板屋があることに気づき、さらに調べていくと、白地の世界へと踏み込まざるを得なくなるところへたどり着いてしまったわけである。黒地と白地はちょうど道教の陰陽思想にある太極の図のように全体が陰と陽とに大きく分かれていると同時にそれぞれの内に、反対の極を抱え込んでいるのである。その構造上の相似性は否定できないものがある。

兼子武雄

カネコ鬼瓦の初代が兼子武雄である。武雄の生き様がそのままカネコ鬼瓦へと至る。これは白地の鬼板屋の基本的な特徴といえる。黒地の場合だと、各鬼板屋の初代の大半は存命しておらず、ほとんどが伝説上の人物となり、鬼板屋としての起こりが全く分からない状態になっている。ところがカネコ鬼瓦の場合はその初代がいまだに健在であり、いかに鬼板屋が起こっ

ていったかが初代の武雄の話から明確にたどれることになる。いわば「鬼板屋の起こり」一般についてのヒントを投げかける実例となる。

武雄は昭和7年(1932)2月1日に愛知県の高浜に生まれている。高等小学校2年の時、つまり武雄が13歳のときに、終戦を迎えている。学徒動員もあり、勉強はほとんどやったことがないと笑いながら武雄は話してくれた。卒業すると職があまり無いなか、土器屋へ入り土器を作る仕事についている。コンロとか土窯とかを作っていた。家のすぐ近くにあった山本土器屋というところで一年半ほど働き、次にコンロ屋の五平松という店で二年半ほど勤めている。しかし、「土器屋もちょっとあまりよくないなあ」、「鬼瓦というのもいいんじゃないかなあ」と考えるようになり、やはり武雄の家のすぐ隣にあった神仲という鬼板屋へ小僧として弟子入りをしている。武雄が19歳になったころの出来事である。この頃(昭和26年)高浜では土器屋と鬼板屋の勢力図が大きく変わろうとしていたものと思われる。武雄はその変化を鋭く見極めていたのである。

その頃は(土器屋は)多かったですよ。ほりや何十軒というほどあったと思いますよ。土器屋さんっていうのは多かったですよ。ええ。瓦屋さん、まあ、この辺はねえ、大きな瓦屋さんにならん前はね、小さな瓦さんがいっぱいあったんですよ。鬼屋さんも相当数があったんですよ。そいけど、土器屋さんがそれより多かったですんじゃないですかね。あの一、土器というところ、あの一、いうなら、細かいのから大きなまでね、いろいろね。土器屋さん、多かったですよ。それはそれで、土器をやったんですけど。それから、まあ、瓦屋さんの方がつてなことで。まあ、土器のほうも、ちょっと下火になったっていうかね。コンロのようなものが売れんようになってきたってことだと思いますけど。

当時、神仲は初代の神谷仲次郎が親方として取り仕切っていた。すでに武雄は19歳になっていたので、仲次郎が小僧としては2年間でいいだろうという事にしてくれたという。そして29歳になるまでの10年間、神仲で職人として働いたのであった。神仲では直接、親方である神谷仲次郎から手ほどきを受けたわけではなく、仲次郎の一番弟子と言われた杉浦民一から鬼瓦を教えてもらったという。なぜ弟子の民一が教えたのかというと親方特有の事情があったからである。

いわゆる親方っていうのはね、まあ、いろいろと、窯とか、ほいから、外交もありますもんですから。ほいで、忙しいもんですから。

まあ、直接教えてもらったのは、民一さんに、大体教えてもらったかな。

民一はとても穏便な人だったという。そして神仲で小僧から亡くなるまで勤め上げた。「一番弟子」の意味は神仲に当時いた職人たちの間で一番できたのが民一であったこと。さらに、仲次郎の一番最初の弟子が民一であった。「亡くなるまで勤め上げた」の意味は、仕事がやれるうちはずっと神仲で職人として働いていたことを指す。民一の弟子であった武雄は民一の作る鬼を次のように表現してくれた。

これはね、… あのお、なんていうのかな…、いわゆる「穏便な鬼だけど勢いがある」という。まあ、そんな言い方しかないわな。

けばけばした鬼ではなかった。やっぱし人柄が出るっていうのかな。

派手なところはないんですよ。穏便に、…。なんていうのかな…。いわゆる、その、自

然さがあるというのかな。そういう鬼だったね。

いわゆる生き物を作られても、優しい。獅子、鬼面も作られたけど、やっぱし、優しさがある。

なんせ、けばけばしたものは無かったですね。

もう一人の職人さんは、ちょっと、けばけばしい、まあ、性分が出ていましたけどね。勢いもあったし。けばけばもしてましたね。

なかなかそういう鬼面を私もよう作らんけど。(笑い)

作るものは、出ますね。あのう、気性というのは出ますね。

武雄が小僧として入った神仲の仕事場の様子を次に描写したい。武雄はそこで主に民一から鬼瓦の手ほどきを受けたのであった。

仕事場はね、まあまあ、あの、昔の工場としては立派な工場だったと思います。今の工場としてはね。まあ、風が通らないう事はない。いわゆる、その、屋根でも、天井が張ってない。あの、いわゆる板がはってない、すのこの屋根だったよね。空からこう…何ていうんですか、陽が差し来るような。

(仕事で) ついとったってわけじゃないんですけど、その人(民一)の近くで、…。

あのね、昔は、今でもそうなんですけど、こう、ずっと並んで、仕事をしておりました。

それを(仕事を)見よう見まねでってことですわね。わからんとは教えてもらうという事で。

民一から神仲の仕事場で何を学んだのかと武雄にたずねた。

何を教えてもらったというのかな…。ほりゃ、まあ、ヘラの使い方とか、いろいろ…。その作業工程ですね。これが、こうしたらいいとか、悪いとか、…ていう事を教えてもらったですね。

ええ、「何を」って言われると困るんですけどね。いわゆる、その、見よう見まねってことが多いもんですから。はい。その当時は、手に取って教えてくれるという事はないもんですからね。

ええ。「見て覚える」という。こうやっとなるから、これを覚えろとか。そういう事が多かったですね。(第1図参照)

民一がいつも言っていた言葉とかがあるかと武雄に聞くとすぐに次のように答えてくれた。

まあ、いうなら…。何ていうのかな。言うなら「仕事は丁寧に」という事と、「あわてずに」ということ。ええ、「しっかり」ってことですよ。

言うなら、穏便な人ですから、口は絶対荒立ててものをいう人じゃないもんですから。ええ、「こうしたらいいぞ」、「こうしたらいいぞ」をいう事しかね、言わなんだしね。

それは、あの、ちょこちょこつとね、言われましたね。「ここはこれじゃいかんでや」という事をね。



第1図

鬼瓦を製作中の杉浦民一

このように民一から直接の指導を常日頃は受けていた武雄であった。しかし、親方の仲次郎も同様に仕事場にいるときは武雄の仕事ぶりを見ていたのである。

これは（ここはこれじゃいかん）、仲次郎さんからもよく言われましたけどね。というも時々は見にみえるもんですから。隣でも多少は仕事してみえたけどね。

それから、また、その後になってから、仲次郎さんの息子さん、まあ、今、会長になって見えるけど、…伸達さんね、…が隣で仕事ならいましたので。ほいで、あのおう、その人（伸達）と一緒にやっておりましたけどね。

何と、親方の仲次郎は一人息子である伸達を修業させるために同じ職場に入れ、しかも武雄の隣に並ばせて仕事をさせたのであった。仲次郎

がいかに武雄を評価していたかを物語っている話といえよう。

民一さんはちょっと離れたところでやっていたもんですから。

その仕事場には7、8人の職人がその当時は常時いて、鬼瓦を作っていたという。

広いですよ。ずっと長い工場です。まだ他にも（他の仕事場）職人さんがみえたり。

そういった中で武雄によると民一が一番の職人であったのである。

まあ、それは一番だったね。

ここで、武雄の親方である仲次郎について描写したい。10年ほど前に神仲の工場で、その

頃、社長であった仲達、さらには仲次郎からは孫に当たる晋（現在は（株）神仲の社長）から話を聞いたとき、仲次郎についての話はあまり聞けなかったもので、ここに記録として残しておきたい。（高原 2003）神仲に小僧からたたき上げて 10 年いた一職人が見た仲次郎についての姿である。

仲次郎さんて人もやっぱり穏便な人だったね。ええ、まあ、何ていうのかな、できる人っていうのかな。

やっぱり、職人から上がった人なんでね。ええ、一代でね、神仲っていうのを建てた人なんでね。穏便に我慢強くやられた人だと思いますよ。

戦争前から戦争にかけてね、大変な時期があったもんですからね。それを乗り越えて見えたていうのは大したもんだと思いますね。

あのう、人に好かれた人だと思いますね。

職人さん（には）、割合厳しかったですね、仕事面では。普通のことでね、穏便なね、方だったけど、仕事面では厳しかったね。

厳しい、…何ていうのかな。「これじゃだめだぞ」、というのをね、はっきり言う人でしたね。仕事面では厳しかったね。潰すってことはなかったけど、「これを直せ」ってことは言われましたね。

「直せ」の意味を武雄に聞くと説明してくれた。

「ここを直せ」という事ですね。「それができるまでやれ」ってことだね。

仲次郎の代は手作りだったと武雄は言う。ある程度、石膏型は使ってはいたらしい。

いろいろなもの、いわゆる、その、何ていうのかな、何でもできたんじゃないかな。いわゆる生き物からね。全部、いわゆる出来たもんだと思います。

旅職人に行っただ話を聞きますもんね。旅も出て、職人として、ほいで、始めたって話聞きますもんね。

昔は大体旅職人で外に出て、修業してってことが多かったんですよ。うちの時代はもうほとんどなくなったもんですからね。無かったですけど。あれだね、旅に出て、ほれで修業して、それから始められたという事は聞きましたけどね。

ええ、だで、まあ、何でも出来なぎゃってことですよね。旅職人という、一から十まで何でも「作れ」って言ったものを作らんと職人としては成り立たんで。

図面から自分でやるみたいだったね、旅職人ていうのはね。自分から図面を引いて、「こういうもの作れ」って言われると、それを図面引いて作るというもんだっらしいですね。うちはそういう経験ないもんですから。

武雄は仲次郎が 77 歳の時に書いた色紙を一枚大切に持っているという。

あのう、「喜ぶ」ですね。はい、そういう、あれが仲次郎さんの言葉じゃないかなと思いますけどね。どういう意味で書かれたかはちょっと…。(笑い)

そんなような、いわゆる、人だったけどね。温和人だったけどね。厳しい人だったけどね。柔和人でよい人だったね。

まあ、ええ、神仲をやめるときに、まあ、言われたのは「おまえは他のものができるが、まだ生き物ができんでなあ」って。 (第2図参照)

その仲次郎の送別の言葉に対して武雄は次のように言っている。

(笑い) その通りだったと思いますよ。まあ「生き物もちいとは覚えんといかんかな」と思っております」って。

そして武雄は一言付け加えている。

前からちょこちょこことやってはいますけど、まだほんとのものはできません。(笑い)

ここで話を土器時代に戻し、なぜ武雄が土器屋から鬼板屋へ変ったのか、そのわけを考えてみる。高浜は戦争が終わった当時、まず土器屋が栄え始め、やがて瓦屋と鬼板屋が栄えてきた。武雄はこの流れの変化をしっかりとらえ、鬼板屋へ移っている。しかし、なぜ鬼板屋なのか妙に引っかかったので、武雄に尋ねたのである。武雄は土器屋で働きながら次のように思っていたと言っている。

そういう事(鬼板屋の仕事)をまあ、やりたかったというのは事実なんです。単調な仕事じゃないもんですから。

まあ、そういう事がやってみたいなあという気がしとったわけですし、まあ、その時代、まだ、19や20歳のころなんですもんで、それで、詳しいことはなくて、そういう事をやってみたいなあというような気がしとったんです。



第2図
初代 神仲 神谷仲次郎

「そういう事をやってみたいな」という気持ちがどこから来たのかがさらに気になり、武雄に聞いてみると昔の記憶が浮かび上がったのである。

鬼板屋さんていうのはね、まあ、いわゆる昔、うちのおやじが、その、職人でちょっといっとる時に、子供のころに、あの一、この工場へ行って、え一、真似事をしたことはあるんですけど。

つまり、武雄の父（兼子^{ちよういち}長一）は農家として農業をやりながら、暇ができる時は他へ仕事に行くという事をしていたのである。その仕事が鬼板屋の仕事だったことになる。

鬼瓦をやったけど、まあ、いうなら職人で、何ていうのかな、型置物をつくったぐらいなことだわな。いうなら、百姓の間間にやっとなぐらいたと思います。

働いた鬼板屋は鬼作であった。（高原 2005）杉浦作太郎のもとで職人として鬼を作っていたことになる。

うちのおやじに言わせると、「鬼仙の弟子になっとる」てなことを前にいっとなぐらいたことがあるけどな。

さらに武雄は父が鬼作で仕事をしているのを記憶していたのである。

鬼作さんでは仕事しとったのは見たことがある。仕事場で見たことがある。やっとなぐらいたという事は覚えがあるけどな。

私はね、子供の頃だけけどな。まあ、小さい頃だと思っただけけどな、行ったことがある。

父は刈谷の方の人で、結婚して高浜の兼子家へ養子として来る前は養蚕教師をして、養蚕の指

導に携わっていた。ところが高浜へ来て農業を始めると農閑期を使って夫婦で鬼作へ行き始めたのである。それゆえ、子供ができると、子供の武雄もつれて鬼作で仕事をしていたことになる。子供の武雄は鬼作で鬼板屋の仕事場で親の働く姿を見ながら、土遊びをしていたのである。この子供のころの原風景が土器屋で19歳のころ、へらを使いながら土を相手に仕事をしているときに、武雄の心に蘇ってきたのだ。それが「そういう事をやってみたいな」という欲求として表れていったことになる。武雄はその気持ちを父親に打ち明けて、武雄の人生は大きく変わった。

おやじが頼みに行ったと思うだ。おやじが行って「そいじゃ聞いてきてやるわ」ってことで、確か、聞いたと思っただけだ。うん。

第二の変化は神仲へ入ってその10年後の29歳の時に起きた。師の民一は小僧の時代から始めてずっと神仲で職人として働いてきた。ところが武雄は神仲から独立することを選択したのであった。

「うちでやりたいなあ」、何ていう気持ちもありましたので…。

武雄は神仲から昭和33年（1958）ごろに独立を果たし、一人で家で仕事を瓦屋からもらいながら鬼瓦を作っていた。ちょうど同じ頃、仕事上、付き合っていたのが深谷定男であった。深谷は「鬼源」という鬼板屋の職人として長く働いていた。その深谷も武雄と同じように別の鬼板屋の鬼源から独立していたのである。つまり新興の鬼板屋がここに二つ生まれ、互いに協力し合いながら仕事をするようになっていった。武雄も深谷定男も元々いた鬼板屋こそ違え、手作りの鬼師であった。その二人がさらに仲間を募って立ち上げたのが深谷産業であった。昭和38年（1963）の出来事である。おもしろいのは深谷産業が目指したのは手作りの鬼板屋では

なかったことである。全く新しい鬼板屋を構想し、実現化させようとしていた。

深谷産業というふうにしたのは手作りじゃなくて、プレスをやるという事で、その会社を興したんですよ。プレスの鬼瓦を作るという事で会社形式にして、ほいで仲間を作って、ほいで、会社を興して、ほいでプレスを入れて始めた。

まあ、その、うちが、まあ、あのう、プレスの先駆者ではないんですけど、いわゆる、その、実際に始めたっていうのかな。それをものにしたのがうちら。

このプレスができたのはね、だいぶ前にできたと聞いております。まあ、実際に稼働できたのはね。(駒井 1972) 実際に使い始めて、その改良を重ねていったのが深谷産業だったっていう事です。

「プレスの鬼瓦の会社」を象徴しているのが深谷産業に集まった武雄と深谷以外の三人の仲間であった。何と、石川武経たけつねが土器屋、田島たかし敬が鳥屋、加藤佐久次も鳥屋であった。実際に手作りの鬼瓦ができるのは武雄と深谷の二人だけであった。鬼瓦とは全く関係のないもので鬼瓦を作ろうと企画すること自体が当時としては破格であった。

プレスという事で、それが(鬼瓦)できたという事です。機械で鬼を作ったわけです。

しかし、誰が高浜で最初にプレスをしようとしたかになると話が少しぼやけてくる。武雄はこの件に関しては次のように語っている。

最初にプレスにね、しようかなて思ったのは、あのう、今でもやって見える石英さんて人の親父さん。あのう、石川英雄さんて

人なんだけどね。その人が、あのう、したって話は聞いてますけどね。

うちらが最初にプレスをやろうとして鍛冶屋さんへ行ったときに、その人がつくった金型があったんですよ。その金型があって、その金型で最初やりましたね。

それで石川秀雄がつくった金型が最初の金型なのかと確認すると、武雄は返事をしたものの、否定するかのような内容の話になったのである。

最初の金型かな…？ えっとね、その深谷産業に五人いた時に神仲さんにも金型があったでね。金型が違いました。ほいで、私が、あのう、ちょっと間におらんようになって(神仲から独立した後)からです。その当時にプレスの地というのが動いたんじゃないかな。

つまり、昭和30年代後半ごろ、プレス機械による鬼瓦の製作が複数の会社または鬼板屋でもって前後してほぼ並行して始まったことが見えるのである。その中でも本格的にプレス機械の鬼瓦製作を開始したのがフカヤ産業だったのである。本格的にプレス機械を使い始めるとすぐに起こることは、機械や工程の改良であった。武雄はフカヤ産業において完成された改良について語ってくれた。

昔は、その、最初やられたのは、鬼瓦で裏を張るという事が出来なかったんです。機械でね。それをやるようにしたというのが、まあ、うちらがね、フカヤ産業としてやった仕事だと思いますね。

武雄は鬼瓦の裏を機械で張る作業について説明してくれた。

いわゆる接着するという事。いわゆる焼いて離れんように、裏を張るという事です。それを機械でやるということ。その手順を考えた。

今は、まあ、みなさっさとやってますけどね。それを考えたのは私たちだったと思います。ヒントになったのは、接着面を多くするという事ですわね。

接着するところを両方を斜交^{はすか}いまっすぐに切ると広がりますからね。そういう事を考えたんですよ。そういうことで、斜交いに切ってはりつけたという事ですわね。

いったい誰が考え出したのかと尋ねてみると、武雄はすぐに答えた。

誰が考えたではなしに、まあ、いわゆるみんなしてどうだろうという事でやってみようとなったわけです。

最初はプレスしたものをいったん外に出して、それをまた石膏の型に載せて、それで裏を張って、また、ほいから出してってことをやってたんですよ。最初はね、それを中でくっつけたらどうだという事で。それを中でくっつけたり、いろんなことをやりましたんですよ。

工程としたらね、いかにしたら、上手くね、やれるかということも考えましたけどね。できるだけ効率よく、早くね、安くできるかってことを。プレスを使うこと自体がそうなんですわね。

このようにプレス機械を実践的なものに改良していく作業はフカヤ産業の内部で新しいものを生み出す創造の情熱であふれたものにしてきたと想像される。しかし、フカヤ産業を取

り巻く環境はまだ伝統的な手作り鬼瓦の世界が主体であり、10年以上の歳月をかけて修業してやっと身につけた技術を持って鬼瓦が生産されていたのであった。そういった伝統的な鬼瓦を作る人々たちの外部からの非難・攻撃は想像を超える激しいものであった。

相当攻撃受けましたけどね。「プレスなんか作りやがって」って。ええ、いわれましたよ。おそらく手作りのほうのねえ、プロの方の人の話、聞いとられることあったと思いますけど。

組合なんか出てくと、「てめえなんだ」って。ようやられましたよ。よういじめられた。(笑い)

白地屋でいじめられるんです。全部手作りの人ね。いわゆる、その、うちより他の人は手作りで、石膏型で作っているんですわ。数をどんどん作るからってことだわね。だいぶ攻撃されましたね。(笑い)

「プレスが癌だ」って言って。

その当時は作れば売れるという時代があったもんですから。ほりゃ、まあ、プレスでも作ればどんどん売れましたね。ようけ作って作って、多少安くてもね。よく売れる。それでコストを下げれるようにしたからね。それが癌だったわけだよ。よういじめられたもんですわ。(笑い)

しかし、現在、そのフカヤ産業時代の仲間は武雄を除いて全部亡くなり、フカヤ産業も存在していない状態になって、唯一残ったのが武雄であった。それゆえに、武雄の語りはなおのこと貴重な証言として重みを増すことになる。武雄が話しているように、プレス機械による鬼瓦の量産システムの確立は、手作りによる鬼瓦にた

ずさわる鬼板屋から激しいバッシングを受けた。ところが武雄も深谷も、手作り鬼瓦の職人であり、この二人が中心になってプレス機械システムが改良構築されていったのである。武雄がなぜプレス機械に引かれていったのかについて語っている。

「ただ、そういう魅力はあったですね。プレスに対する、量産でことに対してはね。新しいものを作るという。」

「フカヤ産業作るって時でも、「うちは手作りやれるから仲間に入らねえで」って言われたけど…、私はそれに魅力はありましたもんですから。」

ここでフカヤ産業の創設者である深谷定男についての武雄の話を引用する。直接フカヤ産業の始まりから深谷を見てきた人は武雄一人だからである。深谷がいなければプレスによる鬼瓦作りは発展がかなり遅れたはずなので、フカヤへの言及は記述する必要がある。

「何ていうのかな。悪くいう人もあるけど、私は、あのう、好きだったけどね。まあ、いわゆる一途なとこだね。」

「こうあったら、こうっていうね。我儘なところは、わがままなところもありましたけどね。そりゃ、まあ、できた人だったと思いますよね。」

「この、手で作ったってじゃ、需要に間に合わないんじゃないかなという事で、ほいで、プレスという事を考えようという事で。」

「プレスは確かにある。眠つとると。それを起さんとあかんじゃないかなという話からですね。まあ、考えてみようという事で。まあ、いろいろ失敗もしましたけどね。」

「プレス仲間っていう、最初は会社というもんじゃなくて、プレスをやろうという仲間を最初に作った。仲間同士でやろうという事で、まあ、やりかけて、プレス一台入れるかという事で、それで入れて。そいからしばらくたってからだね。「じゃ、会社にするか」っていうね。」

「そういうふうになってくると、地元だけじゃなくて、県外まで売り出そうと、…てことですね。そうするには人が量産もせにやいかんし。じゃ、会社で工場を建てて、ほいでやろうという。」

「その当時は、まあ、もうけたと思います。私はそっちの方はあかんですけど…。(笑い)」

「深谷は手作りもしながら、プレスもしてみたり、プレス用の型を作ったりと、いろいろと仕事をしていたという。フカヤ産業にはプレスの注文のみでなく、手作りの鬼瓦の注文も入り、手作りの鬼瓦は、深谷と武雄がつくっていた。深谷は手作りでは何を得意としていたのかとたずねてみた。」

「一番得意だったのは、蛙が一番得意じゃなかったかな。蛙は上手だったよ。よくサッと手で作られておったで。ほいで、亡くなる前、何年か前にはお観音さんをなん体か作られたけどね。小さいのをね。」

「武雄はフカヤ産業に結果、20年働くことになった。昭和58年(1983)、武雄が56歳になってフカヤ産業を離れ、独立してカネコ鬼瓦を興したのである。武雄にフカヤ産業時代に何を学んだのかと聞いてみた。」

「ほりゃ、まあ、いろいろ学んだね。」

人と接すること。人と接することが一番だったと思うね。人と接することに慣れたと思う。職人だけでやるとれば話もできんくらいだと思いますけどね。

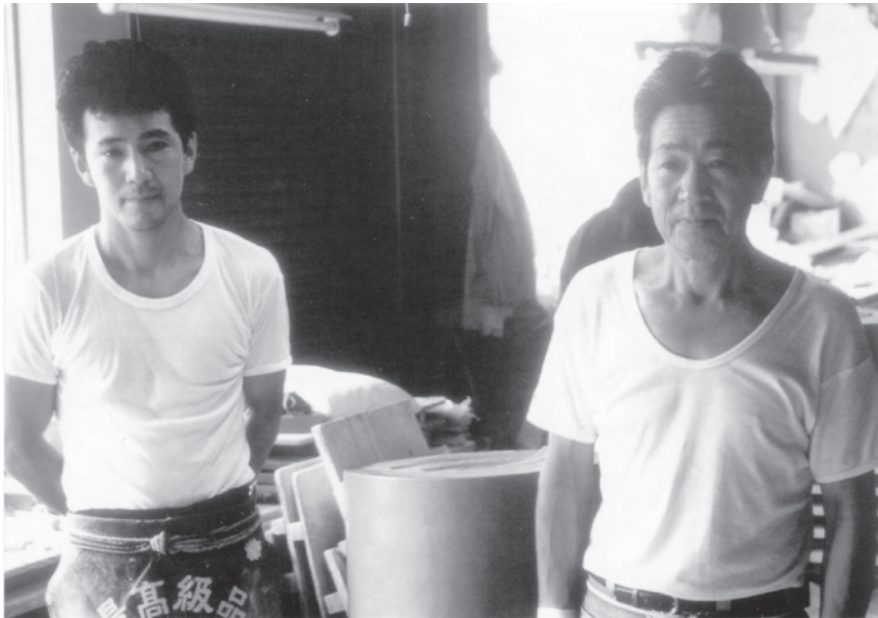
いうなら、我慢強さ。いうなら、嫌み言われても、我慢して、叱られても頭を下げるじゃなくて、次を考えると。それを覚えたという事だね。世間を広く見えるようになったという事だね。まあ良かったなと思っておりますけど。まあ、いわゆるそういう会社の中におったという事で、世間が広くなったと思いますけどね。我慢もできるようになったと思いますけどね。

武雄はフカヤ産業で主に手作りをしていた。しかも同時にフカヤ産業の窓口業務を任されていたのである。つまり顧客との対応ならびに製品の出荷の指示をして常時、顧客と接するようになったのであった。この顧客とのつな

がりか武雄が独立した時に生かされてくることになる。

武雄は息子の稔を連れてフカヤ産業から独立した。直接、独立のきっかけになったことは語っていない。ただ関連する独立につながる理由は武雄から聞くことができた。当時、武雄が56歳になっていたので、一般のサラリーマンだと、退職してから関連会社へ再就職する年代であった。武雄は第二の人生を新しく事業を興し、カネコ鬼瓦にかけたことになる。もともと神仲から独立して一度はやったことのある仕事なので、不安はほとんどなかったのではと思われる。むしろフカヤ産業で20年間実践を積んで、一回りもふたまわりも成長していた武雄は十分な自信を持って新しい事業に挑んだのである。(第3図参照)

プレスはやる気はなかったです。もう、あのう、プレスは、まあ、皆がやるように



第3図

兼子武雄(右) 兼子稔(左) (平成11年9月2日)

なったから。もう駄目だという気持ちでしたね。

つまりフカヤ産業が確立していったプレス機械鬼瓦製造システムは、20年の間に他社に広まっていき、プレスの鬼板屋が高浜市に乱立する状態になり、過当競争的な状況が生まれていた。

今から生きるは、何ていうのかな、あのう、手作り。いわゆる自社で作りを主にしやっつかんと生き残れない。また、それに、そういう仕事は金儲けできんけどね。まあ食うだけは食えるだなあと思って。

まあ、深谷さんもよく言っておただけど、「作りは儲からん」てことは。確かにね。よく言っておられた。儲からん仕事は確かなんですよ。ずっと考えておりましたけどね。儲からん仕事ですよ。だけど食べれん仕事じゃないですよ。食べれるだけ食べれるけど、儲かる仕事ではない。量産できんからね。

ただ、まあ、やりがいがあるというのか、難しさがあるから、やりがいがあるってことなただけど。底が深いし。まあ、自分の、まあ、主観も入りますね。ええ。こうやってみたいという気持ちもできますのでね。ほいだで、いいんだけどね。プレスはそのままだけどね。

武雄はこのようにプレスと手作りの違いについて話してくれた。プレスと手作りによる鬼瓦製作の違いは武雄の話からよく伝わってくる。しかし、鬼瓦は単なる製品、つまり屋根を葺く瓦として水や火から屋根を守るという機能を果たす性格を持つと同時に、美を表現する性格をも同時に存在する。手作りの機能的な側面を迫るとプレス生産の開発が中心に

なり、フカヤ産業が迫った領域に至る。ところが鬼瓦作りを美的表現とみなすと、手作りのもう一方の領域には芸術性、独創性といった瓦の美の世界が広がっていく。武雄にこの点を指摘すると、武雄の考える瓦への姿勢が見えてきた。

そこまでは芸術家じゃないもんですから。だいたい、うちら自体が私の気持ちが鬼師じゃなくて、「真似師」だってよく言うんだけど。(笑い)

「鬼師ではなく真似師である」という言い方は武雄の口から初めて聞いた話であった。他の鬼師からは耳にしたことはなかった。「真似師?! ですか」と驚いた私に対して武雄は話を続けた。

(笑い) いわゆる見たものを、見てきたものを作りたいとか…、そういう方が、見て作る方が好きなもんですから。

独創的にこうやったらいいっていうね、…、考えたこともありますけど…。それを作って、どうこうっていうのはやらないもんですから。だで、まあ、見たものを、「これはいいな」というものを作りたいなと思いますから。

いいなってものは見た眼で、まあ、いうなら形がいいとか、こういうものもいいとかね。だいたい生き物とか、そういうもんが多いわけなんですけど。こういう変わったもんが面白いなあとか。そういう考えただけどね。

武雄が神仲を独立するとき、仲次郎から言われた別れの言葉「おまえは他のものができるが、まだ生き物ができんでなあ」がその後もしっかりと武雄の心に刻まれていることが伝わってくる。おそらく、いつも意識してその言

葉を胸に技術の向上を図ってきたものと思われる。(第4図参照)

流儀に関しては基本はあくまで神仲流である。10年間、実際に神谷仲次郎が興した神仲で小僧からたたき上げてきたのが武雄だからである。ところがその上にフカヤ産業で20年間、深谷定男と一緒に鬼瓦を作ってきた。フカヤ産業で手作りの中心になったのは深谷と武雄である。20年間、深谷から何も影響を受けずに事が運んだとは到底考え難い。深谷からむしろかなりの影響を受けたと考える方が自然である。ところが、深谷は「神仲」の職人ではなく、「鬼源」という鬼板屋で長く職人をしてきた人物である。鬼源の流れを色濃く受け継いだ鬼師であった。

そういうね、混ざっちゃとるはね。(笑い)
ま、今は昔の流儀をどうのこうのっていうのは一切ありませんですから。好きなようにやってますよね。

まあ、いわゆる白地屋というものでいくと、白地屋は半製品なんですよ。半製品だけど、白地屋としては製品なんですよ。だから「白地で、傷がないもの…を作れ」という事を最初から言うんですけどね。

「白地で切れるものは製品じゃない」と。それが、まあ、いわゆる流儀なんだけどもね。難しいことはなくてね。

武雄は息子の稔以外に、三人の弟子をとり、鬼師として育て上げている。それゆえ、技術を伝えることには親方として特別に意識してきた経験を持つ人物である。武雄が鬼師になる時は神仲の民一から「見て覚える」ことを学んでいるが、逆の立場になった武雄がいかに弟子たちに教えてきたかをたずねてみた。

重点的に教えてくのは難しいんだけどね、やっぱし、いわゆる、「見て覚える」。「日にちが薬」。



第4図

鬼瓦を製作する兼子武雄(平成12年1月18日)

まあ結果、焦ってもやれないってことですよね。自分で、体で覚えていくしかないもんですから。いわゆるヘラ使いなんだけどね。それと、ほいから、「形を見て、覚えていく」ということ。それを作っていくという事だもんですから。

別にどうという事はないんだよね。うん。そこは難しいと思うけどね。たとえば、昔からよう言う、「見て覚える」、「見て覚える」ってことは言うだけだね。

「見て覚えるしかない」と思うだ。細かいとこというか、ヘラの使い方とか、「こうやれ」って教えられるけど。自分でやれることは手を添えて教えることはできませんので、あとは自分しかないということ。「こうやってやれ」ってことは言えるけど。やってやるという事は出来ないんですよ。手を添えてなんて事はできませんもんで。

まあ、何でもそうだと思うけど。まあ、あのう、教えるっていっても、まあ、ほとんど「見て覚える」をやっていくしかない。日にちをかけるしかないよね。

3年、5年じゃだめだっという事をよくいうだけだね。込仕事だから、我慢だわな。

うん。えらいこともあるでな。立つとればえらくなってくるし。(笑い) 腰曲げると腰が痛くなってくるし。(笑い) 難しいわな。体を、あのう、何ていうのかな、あのう、固定してやらんとできないもんですからね。(第5図参照)

ここでまた流儀の話に戻りたい。自らの流儀を私のような部外者に説明するのはなかなか難しいものがあることは承知しているし、理解もできる。ところが、鬼師という同じ土俵の上では流儀がたとえ現代では昔ほど言われないに



第5図

鬼板(粘土板)に図柄を描き込む兼子武雄(平成23年3月1日)

しろ、その違いが表面化してくることがある。その実例をここに示したい。すでに山下鬼瓦の山下敦について『鬼師の世界』(高原2011)で詳しく描写している。他の鬼師とはかなり変わった経歴の持ち主である。その山下敦はカネコ鬼瓦と弟子ではないがそれに類似した特別な関係を形成している。この山下敦とカネコ鬼瓦のやり取りが、いわゆる「流儀とは何か」についての具体的な実例を我々に提示してくれている。この件について話してくれたのは武雄の息子である稔であった。

仕事が多すぎて、(自分たちで) やれなくて、(仕事の) 期間が決まってるんですよ。それが(カネコ鬼瓦だけで) 出来なくて。

それで手作りをやっている人で頼めるところがってことで、山下に持ってってやってもらうという話で。

最初にうちらが仕事を始めたころに、(山下の) 親父さんが山下を「見てくれ」って、一回来たことがあるんですよ。うちらんとここに。そんな時はこの工場じゃなくて、自分とこでやってたんで、狭くて、入れないんですよ。場所が。

あれ(山下敦) 自体がよそのとこで修業してて、… 山本鬼瓦だったとか…。丸市の…。両方やってたんですね。そういう流儀がまた違うんで、あのう、あかんで…。また山本さんに入ってた頃だもんね、来たのが。やめてこっちに来るといのは失礼だであかんっていう話で断ったことがある。

それからだな。ほいで、あのう、山下が鬼秀か、静岡の、あそこに行ったり、瓦屋のどっかの西尾に行ったりして、いろいろなことやって、そういうやつ聞いてて、自分より年下だったんで…。ほいで「頼め

る」っていう話があったんですよ。あの、白地屋とか話しとって。「頼むことができるか」って言った時に、「いい」って言ったもんで…。

ほいで、やってもらう時点で、自分が行かなければ自分たちの形ができないんですよ。向こうの流儀でやられちゃうと、うちの製品にならないんで…。ほんだもんで、あれのとこ頼みに行ったときに、「この形で作ってくれ」、「こういうやり方をしてくれ」。あのう、向こう、前はうーんと鬼を磨く時に柔らかかったんですよ。うちらは固いやつを磨くんですよ。そうすると光沢が違うんですよ。並べた時に。だもんで、「固くして磨いてくれ」って。

うん、ほいで、傷がよう、ちょっと出たんで、「それもだめだで」って言って、作り方も教えて…。

自分がしょっちゅう、昼間に行けないんで、夜7時、(仕事が) 終わってから行くで、あのう、「おるか」ってったら、「おる」っていうもんで。それでやっとなって、やっとなるところを見た時に、もうだめだったもんで、「あかん」、「そのやり方じゃ、もう絶対切れるで、もうこれじゃ無理」って。そういう事全部一から教えたんで。

一つの鬼板屋内で収まり切らない仕事 came 来た場合、他所の鬼板屋にその仕事を依頼する事態が生じた場合に流儀の問題が生じてくる。つまり同じ鬼板屋内では流儀は顕在化しにくいですが、違う鬼板屋と仕事上で同じ仕事をするときに、流儀がいきなり表面化、前景化してきて、鬼師はその流儀の統一に全力を傾けることになる。流儀は今もはっきりと存在しているといえよう。

兼子稔

カネコ鬼瓦は現在、武雄はまだ健在で、親方としてカネコ鬼瓦を取り仕切っている。しかし、すでに生産の主力は二代目に当たる兼子稔に移り、現場で活躍しているのが実態である。(第6図参照) その稔についてここでは言及する。生まれたのは昭和36年9月17日で高浜生まれの高浜育ちである。小学校、中学校のころはまだ父親が何をしているのかほとんど知らなかったという。理由は武雄がその頃はすでにフカヤ産業に勤めていて、家で仕事をしていなかったからであった。小、中学校のころは友達と遊ぶことが多かった稔が、鬼瓦の世界に直接触れるのは高校になってからである。

高校になってからかな、バイトをやったじゃんね。その場所(フカヤ産業)で。

高校の時からやっていたのは主に配達とかをしていて、少しずつ鬼瓦を仕事としている父を知り始めることになっていった。

ついて行くだけで、自分運転できないんで…。ほいだもんで、横に乗ってって鬼を運ぶのを手伝うだけ。あとは中で鬼を動かしたり、なんか積んだり、トラックに積むのを手伝ったり。そういう事を全部自分でやってた。

父の武雄は別のところで手作りの鬼瓦を作っていたのである。フカヤ産業は当時、100坪の二階建ての工場が二棟あり、一つがプレス工場、もうひとつが倉庫と窯になっていた。また窯のある建物の二階に乾燥場があり、手作りの工場になっていて延べ400坪の工場として鬼瓦を生産していたのである。稔は高校を卒業すると、すぐにフカヤ産業へ入ることになった。



第6図

鬼瓦を製作する兼子稔(平成23年2月25日)

配達半日、手作り半日で、最初始めたんです。

一緒にインタビューを聞いていた武雄が当時のことをさらに詳しく説明してくれた。

だいたい朝は手作りで、うちの隣に仕事として、ほいで昼からになると、配達に出るじゃんね。みんな出るから、振り分けて。

武雄の隣で実際に働き始めた稔も手作りを始めたころの話をしている。

最初は何やつとるか、わからなかったですね。たぶん。「これをやれ」と言われてやってただけで…。

うーん。でもだいたい、うちらの場合だと型置物があって、形ができちゃうんで、それを…、型置きをやって何個か起こしたら、これがすみますよね。そしたら、それを仕上げる。その繰り返しだったんですよ。(石膏型から)起こす。それをずっとやってたんで。

たぶん、最初は何カ月だと思うんだよね。ほいで、二年ぐらいで手作り自体はずっとやるようになってたんで。だもんで、それは多分、何ヶ月ぐらいで順番に覚えていったじゃないかな。

武雄は同じ仕事場で手作りをしながら、稔を指導していたわけであるが、その当時、どうしていたのか興味があったのでさらにたずねることにした。

別に。見てるだけです。いかんとかだけ言うだけで…。うちらも今でもそうなんだけど。

うん。だめなとこだけ、「あかん」で言うだけで、やり方がわからんやつは、もう最初に「こうやってやれよ」っていつて教えて、もう、あとはやらしてるだけで…。まあ、大体その通りですね。まあ、今一人おるんだけど、それがやらしとるのと一緒。だもんで、わからん時に、「これがわからん」で言うと、それをやってもらって、覚えるていう。

だもんで、いろいろですね。あの、順番に難しくなってくんですね。作るもんが。

見とって、「これがやれるだらあ」ってつて。これがやれるようになっていく。これしかないと思う。

今、うちらのここに来ると、一日立ってなきやいけないんですよ。ほうすると、立つとれないつす。丸一日立つとるつていうのは大変です。うちらがやってたより(フカヤ産業時代)、ここで(カネコ鬼瓦)やつとるのが大変だと思うね、逆に。

つまり、フカヤ産業のころは朝作つて、昼から配達に車で出かけていたので、今から考えるとはるかに楽だったと稔は言っているのだ。手作りを始めたころは何気なしに働いていた稔が、やがて手作りに興味を示すようになっていった。

3年か4年ぐらいだと思うけどね。まあまああのものできるようになってから。それまでは、もうなんか直されたりなんかするんで。それがもう直されなくなった頃かね。

手作りに慣れてくるとやがて型置物ものから、図面を見て鬼瓦がつくれるようになってくる。

3年から5年ぐらいでたぶんできえると思う。あのう、普通のオーソドックスなものではできると思いますね。型置きでやったやつのは大きい版だとか。手で作らなきゃいけないやつ。こういうやつは図面からなんで。これだと3年から5年ぐらいたてば多分できちゃいますね。

その段階に来ると、やはり職人としての基礎が出来上がり、事実仕事場での扱いも変わってくる。

そのあたりからもうセイブンになっちゃうんですよ。あの、作ったもののいくらかがうちらにもらえる給料になるんです。

「セイブン」という知らない言葉が出てきたのでいったい何を意味しているのかを確かめた。

作った金額がありますよね。あの、白地で売れる値段がありますよね。そのパーセントです。

うん。だもんで、このものを作ると50%うちらが給料をもらえると…。だもんで、50万円のやつがくれば25万円はうちらの方にもらえる。

もちろんこのセイブンのパーセントは各鬼板屋において変化し、良質のものを作ると変化するという。型置きだと当然のことながら、たとえば30パーセントといったように下がるわけである。つまり出来高制になる。セイブンになると、それまでの時給制とは基本的に変わってくる。腕前が直接給料に反映されることになる。腕のいい職人は良いものが早くつくれるようになっていく。稔の言葉がそのことをよくあらわしている。

あの、できるようになれば、数が出る。

欲が出ると早くやるようになる。こういう仕事はね、いうなら早くやるというか、やれば早くやれるし、ほれから、やらなきゃ、あの、…やらんでも済んじゃうんですよ。やってれば一つのを1日いじくっとなつて…。それを、ほの一、いかに今の自分の腕を磨いて、早く正確なものを作るかという事を習得するのが大変なんですよ。ね。それで、それを習得してしまえばあとは楽にできるということ。

最初はできないんですよ、それが。一本線を彫るだけでも、なかなか。「真つすぐな線を彫れ」って言われると、こうなつて彫れちゃうんですよ、デコボコにね。それを真つ直ぐにしようと思うもんで、何べんでも彫ったり消したりするんですよ。まあ、そこらがね、早く彫れるように自分の手を磨くより手がない。(笑い)

横で聞いていた父の武雄が息子の稔の話につけたすように鬼師について語ってくれた。

あの、プレスで鬼でも右と左がよく見ると違うんです。結局、最初は手で作る原型なんですよ。まずねえ、良く見るとほとんどね。

まあ、いわゆる、その、機械で作ったものじゃないでね。原型は手で作ったものを、あの一、原型に起こして、それを機械化するだけのことですからね。そりゃ、まあ、ほとんど違いますね。なかなか右と左とね、ピタッというわけにはいかんですよ。同じように作るつもりでやるだけどね。

すぐに「右左がピタッと行く人は技術が高いという事ですか」と武雄に聞いてみた。

まあ、そういう事ですね。あの、彫りの角度でも違いますし、深さでも違いますし、そりゃ、まあ、えらい変わってきますね。

稔が続けて左右対称の難しさを話し始めた。

左右対称は難しい…、逆に。(笑い)でも、ピシッとやっちゃうと、手作りじゃないっていう人もおるしね。逆に…。

だもんで、「右と左が違うのが当たり前だ」って、手でやったやつは。

そして武雄が手作りの心のようなものを語るのであった。

そりゃねえ、覚えると面白いと思いますよ。ほいけど、覚えるまでがねえ。ほりゃー、まあ、ちょっと5年、5年から10年。まあ、自分の思うように作ろうと思うと、10年

かけんとねえ…。大変ですよ、そりゃ、思うようにやれんと怒れてきちゃうねえ。(第7図参照)

(性格については)なんとも言えんねえ。気の短い人もいるし、関係ないと思うよ。まあ、そりゃあねえ、「好きだ」ってことが、まあ、一番。好きじゃなきやいかんね、ほりゃー、ということもね。まあ、順番好きになつてっちゃうけどね。

どうして好きになれるのかと思い、武雄に聞くとすぐに返事が来た。

そりゃ、まあ、「面白さ」じゃない。作る時の面白さしかないと思うね。いわゆる陶芸家らがつくるのと同じようなもんで、そんな立派なもんはよう作らんけどねえ。陶芸家らが自分のイメージを、あの一ねえ、それを出すというのと一緒じゃないですかねえ。



第7図

弟子に鬼瓦の指導する兼子稔(平成23年2月25日)
「弟子は内藤貴文(図の右側)で平成21年9月より瓦屋の(有)石保^{いしやす}から依頼を受け職人として教えている」

その自分が思ったイメージがうまく具体化、具象化できたその時が「面白さ」につながることになる。稔が武雄に続けてその時の微妙な心情を話すのであった。

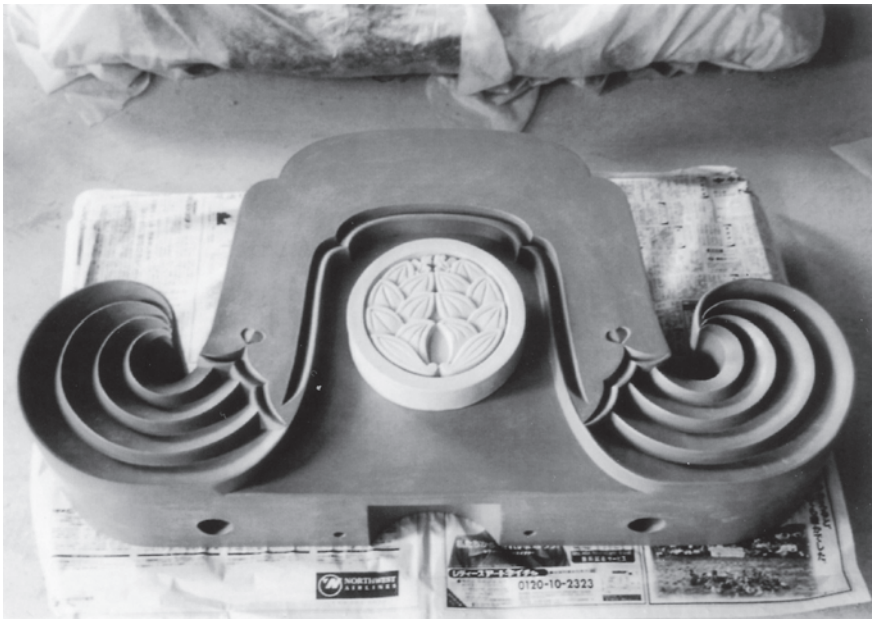
うれしいですね。満足感があるというか。そりゃ、あの一、できて、仕上がったんだけど、格好悪いけど、まあ、品物にせにゃあいかんもんで、「まあ、いいや」ってそいつを納めちゃうんですけど、自分では不満足なこともあるでね、逆にいえば。

稔の言葉は鬼瓦は本来、製品であることをよくあらわしている。芸術品は多く作ったなかで作った本人が本当に満足のいくものを選び出して出品することができる。一方、鬼瓦は早くかつ良いものを作ることに力点があり、しかも歩留まりは高くないと採算は取れない。そういったなかにおいて、なおかつ光るものが生まれるのである。(第8図参照)

最後に「カネコ鬼瓦」の由来について書いておきたい。フカヤ産業から独立して白地の鬼板屋をおこす時、鬼板屋の独特な名称である鬼師の「鬼」と初代に当たる兼子武雄の頭文字をとって「鬼武」にすることが考えられたはずだが、実際につけた屋号は「カネコ鬼瓦」であった。昭和62年(1987)に始まっている。これについては、稔がわかりやすく話してくれた。

ま、二人で考えて、ほいで「兼子」でもカタカナにして。そのまま名前を鬼瓦にすりゃあ、いいじゃないって感じで。(笑い)それだけですね、うちらは。一番わかりやすいし。兼子が案外他のところでも浸透していたんで。あもう、親父の名前が。

「武雄」というのはあんまりいなかったんだけど、「兼子」ていうので案外知られていたんで、他のところに。兼子の方がわかりやすいし、逆に「鬼武」何て言ったら、まあ、全然わからない。(笑い)



第8図
御所型一文丸二抱だきみょうが名荷紋入り 兼子稔 作

だもんで、兼子っていうだと、フカヤさんで、もう、手作りやってるっていうのが全部、岐阜からほとんど知ってたから。だもんで、うちらが始めた時には岐阜しか行かない。営業はもう、こっち（高浜）はもうほとんど全然なくて、岐阜を三軒もらっただけだったね。

武雄もこの件についてコメントしている。

それに、なんていうんだ。やめた時に、「この三州では商売をやっちゃいかん」と思ったもんね。あのう、他の人に迷惑かけるから。やらん方がいいだろうと思ってたけど。

岐阜の方ならね、まあ、いいだろうという事で、まあ、そういうふうで、まず岐阜の方へ、「ほういじゃ行って仕事もらってくっか」って行って。三河じゃね。近くじゃあんまり良くないから。

まとめ

カネコ鬼瓦についてまとめてみた。今回初めて独立した白地の鬼板屋を扱った。これまで、黒地の中の白地屋といった黒とも白ともいえる中間地帯にある鬼板屋から明白に白地のみの世界で生きる鬼板屋に光を当てたことになる。その特徴はカネコ鬼瓦そのものが初代、兼子武雄の生きざまをそのまま現わしているという事だった。こういう事は黒地の鬼板屋ではありえなかったことである。黒地の鬼板屋を調査し、話を聞きながら、いつもまとわりついていたもどかしさがあつた。それが初代がどういふわけかはっきりしないという事実であつた。そのことはとりもなおさず、その鬼板屋の始まりが見えてこないという現象であつた。

ところが、カネコ鬼瓦の場合は今まで闇のベールに包まれていた鬼板屋の始まりが初代

が健在であることによって鬼板屋がどういう経緯でおこってきたのかを検証することができた。また、さらに、兼子武雄は昔も今も手作りの鬼板師ではあるが、フカヤ産業と深くかかわり、プレス機械による鬼瓦の生産にも直接関係し、その発展に貢献していた。つまりプレスの機械生産システムは鬼瓦の技術に精通していた手作り専門の鬼師が深くかかわっていたことが浮き上がってきたことになる。そして、その発展に寄与したフカヤ産業の創立者たちは武雄を除いてすべて現時点では存命していなかったのであつた。

カネコ鬼瓦の研究は大きく二つのことに結果として貢献する。ひとつが鬼板屋が一人の職人からいかに生まれていくのかを概観できること。二つ目が本来なら相反する二つの流れである手作りの鬼瓦製作とプレス機械による鬼瓦製作はもともとは根が一つであること。プレス機械生産による鬼瓦の発展に手作り専門の鬼師が大きくかかわっていたことが見えてきたのである。ところがひとたびプレスによる鬼瓦の機械生産システムが完成すると鬼子のように手作りの鬼師たちから嫌われ、誹謗中傷されたのであつた。

参考文献

- 駒井鋼之助 1972年 『かわら日本史』 雄山閣
 高原 隆 2003年 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛系(1)—」 『文明21』 第10号：163-189
 ———— 2003年 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛系(2)—」 『文明21』 第11号：81-132
 ———— 2005年 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(3)—」 『文明21』 第14号：97-111
 ———— 2007年 「鬼師の世界—黒地：丸市、(杉莊)、萩原製陶所(1)—」 『文明21』 第19号：55-72
 ———— 2008年 「鬼師の世界—黒地：丸市、(杉莊)、萩原製陶所(2)—」 『文明21』 第20号：79-100
 ———— 2011年 「鬼師の世界—黒地：山下鬼瓦と白地：山下鬼瓦白地—」 『愛知大学総合郷土研究所紀要』 第56号：51-78

